不倫の恋

佐野栄一

不倫こそが美しい

かつて、越路吹雪が歌って大ヒットした「ラストダンスは私に」というシャンソンがあるが、これはどういうシチュエイションの歌なのだろうか。原詞を読んでみてふと思ったが、これはもしかすると不倫の恋愛なのかもしれない。内容から若い男女を想定するには無理があり、また結婚という絆があるにしてはあまりに女の心遣いが繊細で深い。一部引用すると、「わかってね、あなた、とても愛しているのよ。だから、もう、たった一つの望みしか持たないことにしたの。そうすれば、いつかあなたが行ってしまうようなことはなくなるわ。私たちの愛はとても素敵だわ。」

不倫という言葉は、日本の風土ではどうも薄汚れた印象を呼び起こすが、この歌は上品で美しい。いやこの歌だけでない。十九世紀、ことにバルザックの世界においては、不倫こそが、最も美しい恋愛劇を作り上げる要件になっている。

不倫の理想と現実

よく知られているように、上流社交界では、結婚は家柄と財産によって決められる。そのため、結婚後、妻が年齢差のある夫とは別の男に恋愛することは自然であり、半ば当然の権利とされてきた。しかし、そこには誰もが認めるいわば理想的不倫と計算ずくの不倫とがある。理想的不倫の代表格は『ペール・ゴリオ』のボーセアン夫人とダジュダ侯爵であろう。また、後者の例は数あるが、代表格はやはりラスティニャックとニュシンゲン夫人だろう。

金と名誉が絡むと不潔になるのは世の常である。貧乏貴族ラスティニャックは金持ちの夫人の後ろ盾がほしくてニュッシンゲン夫人に近寄り、一方、ゴリオの娘である夫人は彼の由緒ある家柄が魅力だった。この二人に対してボーセアン夫人とダジュダには初めから両方が揃っていた。その上、夫人は洗練された趣味と知性の持ち主で、そのサロンには超一流人しか入れず、ダジュダの方も社交界指折りのダンディである。にもかかわらず、この関係がやはり金のために壊れる。ダジュダが、彼女との間はそのままに、金持ちの娘と結婚しようとしたからだった。

パリ社交界における美学

上流社交界はひときわ透明な場である。隠し事ができない。たとえば『幻滅』のリュシアンは、オペラ座のデスパール夫人のボックス席に入るとき、貴族だった母の名を使うが、彼を見たラスティニャックにまたたくまに素性を暴露される。ボーセアン夫人の恋愛に起こったことも、社交界はすぐに察知した。し

かも、まもなく開かれる彼女のサロンで、夫人がどう行動するかさえ、この世界の美学を知る彼らにはおおよそ予想がついた。

だが人は、たとえば、安宅の関で弁慶に打ち据えられる男が義経だということを調べる側もわかっているがゆえに感動するものである。つまり、演技という嘘は、しばしば事実をありのままに表現する以上に心の真実を伝えうる。その日、ボーセアン邸には、「五百台もの馬車」が押し寄せ、夫人の演技を待っていた。「誰もが失寵の瞬間のこの高貴な夫人」を見たかったのである。しかし、「彼女は自分の苦しみを超越した誇らかな態度を見せ」、「苦しみも、誇りも、偽りの喜びも見せていなかった」。そのため、「誰にも彼女の心のうちを読み取ることはできなかった」。ところが、実際は誰もが彼女の心のうちを知っているのである。夫人が求められている演技を完璧に演じれば演じるほど、その演技はわずかでも洩れれば毀損しかねない夫人の心の品位と繊細を感じさせる。演技は逆に、心にある真の悲しみをすべての人に了解させるのである。

こうして、ボーセアン夫人は決然とパリの社交界から去っていった。不倫には保証がないのである。それゆえ、そこでは常に情熱が試され、欲望が試され、美学が試され、いわばその人間のすべてが試される。ボーセアン夫人は社交界の美学に殉じたが、それはまさに『人間喜劇』の華であろう。バルザックがあれほど上流社交界に憧れたのもそこに存在しえた美学に理由があったのかもしれない。